



佐渡金銀山 未来に残そう 世界遺産

金銀山よもやまばなし(10)

火薬庫

道遊の割戸の南側に浄水場があり、その南脇に初期の鉱山集落、上相川町が開けています。集落の東側、床屋町・鍛冶町・田町の住居跡の上方に位置し、後方(東側)は山(一部岩盤)が切り立ち、前面(西側)にはため池があります。土塁で囲まれた、より一段低い窪地の小平坦地に、奥の方は南北に3棟、前面は南北に2棟の計5棟が2列に並んで建っています。



図のとおり火薬庫は1棟ごとに周囲を石垣の土塁で遮断することによって、事故に対する防衛措置をとっています。火薬庫は鉄筋コンクリート造りで、屋根と扉の一部が滅失しているものの、建物のほぼ全容を留めています。入り口は北側の山側で、土塁で挟まれた細い通路を通って各火薬庫へ入る構造であり、万一に備えて通路のさき土塁がある仕組みになっています。

西側の2棟が並ぶ低い平地をA地区とし、東側の3棟が並ぶ山寄りをB地区とします。A地区の右側から順次1号棟〜5号棟と呼称します。

各棟の規模は、1号棟が5・6×5・6mの正方形で最も小さく、2号棟は9・6×5・6mで最も大きく建物の向きが横になっています。B地区3号から5号棟は5・6×9・7mで規格が等しく、間口の狭いほうを

入り口にして規則正しく並んでいます。屋根は崩壊しているため瓦葺きかどうかは不明、建物は平屋造りで、高さは棟高3・90m、軒高2・50mを測り、入り口はA・B地区の各棟が土塁を隔てて向かい合う形態となります。

なお、坂下建築構造設計事務所 務所の坂下実氏のご教示によれば、日本で最初に鉄筋建築物ができたのは、明治29年(1896年)の日本銀行であり、明治20年代に鉄筋技術が導入されたといえます。また、以前株式会社ゴールデン佐渡の取締役社長であった大野保二氏のご教示では、火薬庫は当時から貯蔵量によって1〜3級の等級に区分され、それぞれ厳しい規制があつて災害防止に重点を置いたといわれます。また、当時佐渡鉱山で働いていた相川坂下町の塩義昭氏の話では、『火薬庫の周囲には常に水が廻る仕組みになって防火体制に細心の注意を払っていた。しかし、火薬庫に番人



は常駐せず見張りもいなかった。無人の構内へ一人で火薬を取出しにいった覚えがある。持ち出した火薬は事務所へ届け点検を受けてから使用した。その後不便なため、高任へ火薬庫を移し、さらに今の水道事務所の傍らにある廃坑を利用した」となります。

佐渡鉱山における火薬を使用する採鉱は、明治元年からで、イギリス人ガワーによって伝えられました。『本途御仕入稼、銅稼敷内にて合業仕

掛試度、右品御鉄砲方より御私の義書面申上済」と記録があります。また、明治18年(1885年)の、採鉱関係の主な需要物品の、一か月の消費量の記録に『火薬500貫、ダイナマイト500磅、八角鋼5000磅』とあります。

上相川のうっそうとした森の中、最初の大山祇神社跡地のすぐ下に静かに眠る旧火薬庫の遺跡、鉱山町上相川と共に、一度は訪れたい遺跡です。

佐渡金銀山室 ☎ 74-13115

金山の碑がお目見え

佐渡金山の第3駐車場に、金山で採掘された約2トンの金鉱石と、小千谷市出身の作家、田中志津さんの著書「佐渡金山を彩った人々」からの一文が刻まれた碑が建設されました。



▶ 中央が金鉱石、右が文学碑

